

真宗大谷派岐阜教区

# 岐阜同朋 ぎふどうぼう

## 2010.03 101

- 生きるって どういうこと(都竹 香寿子)
- 古寺を訪ねて ●My Book ~心に残る絵本の紹介~
- 今を見る 今を問う ●ぶつじあれこれ
- 岐阜教区同朋会館絵画~赤い川~



井波別院瑞泉寺 山門



### 赤い川

夕日で真っ赤に映えた川面に、一艘の木船と一羽の白鷺が。それは、美しい夕暮で、一人川原に佇んでいる。

目前の木船に乗り込み：いや、木船そのものになって、川の流れに身を任せ何処までも漂ってみようか？

いやいや、それより傍らで時折魚を啄む白鷺になって、夕景の空から

きらきら輝く川面を悠々と俯瞰してみようか？

そうすると、赤い川の流れがやがて一本の光の道となって河口へ、そして大海に流れゆくが見えてくるはず。

同時に何本かの光の筋が、絶え間無く大海へと流れこんで、更に、その先、

全視界が光の輝きで満たされてゆく。

これは、全て金色に輝けと願う法蔵菩薩の悉皆金色の世界か。

夕日で真っ赤に映えた川面に、一艘の木船と一羽の白鷺が。

小笠原 宣

岐阜教区同朋会館新築に当たり、上宮寺住職・小笠原宣さんより一枚の絵画を寄贈していただきました。小笠原さんの想いが込められた絵画「赤い川」が会館の白い壁に掛けられています。



### 編集後記

「岐阜同朋」は昨年未だに第100号記念号を全ページカラー誌面で発行し、「すてくきれいで大変よい」とのご好評をいただき、編集委員会一同有難く思います。

野山の植物は、根を張り幹からたくさんの枝を出し、誰の目にも留まるわけでもないのに、手を抜くことなく一生懸命咲いている。

我々編集委員会一同、諸先輩方が種を蒔き、根を張った「岐阜同朋木」に多くの花を咲かせ、親しまれ、たくさんの方々の目に留まる教化誌の発行に取り組んでいきます。今後ともご意見ご感想などを頂けたら有難く思います。(大橋)



# 生きるとって

道半ばの私ですが、一番大切にしていることは「至誠を貫く」ということです。至誠というとなんだか難しく聞こえますが、その時に与えられた仕事や、やらなければならないことを真剣にやることです。例えば掃除、洗濯、炊事などの過程から自分自身の生きる意味を模索しながら、ふだんの生活の中で「至誠を貫く」こと、それは私にとって出来るように出来ない大きな課題です。

ただただ目の前のことに取り組み、そこから生きる意味を探求するということは、日本で昔から行われてきた「道」と名の付くものに表れているのではないかと思っています。私は幼いころより剣道を習い始めましたが、この「道」の心に惹かれ、今では華

近隣の人がお手伝いをするのを見てびっくりしました。でもお互い助け合う姿を見て、人と人とのつながりに温かいものを感じました。葬儀に関して思い起こせば、「お淋見舞い」も何の事だかさっぱりわかりませんでしたし、葬儀後にお供え物をお手伝いしてもらった人に配る風習も初めて見ました。葬儀に関することだけをとってみてもこのようにこととですから、生活していく上で私の育った慣習と違ったり、知らなかったことは山のようにありましたが、義父の優しい心遣いで良い思い出と共に覚えることが出来ました。

介護が終わって間もなく再び教員の仕事に就くことが出来ました。いろいろな事を吸収し日々



# どろうどろう

道、茶道、着付けなどの多くの習い事をしていきます。お稽古事の数は増えていく一方ですが、この時間は自分と向き合う大切なもので、私にとって欠かせないものです。よく見て観察し、上達を願って努力するという一連の道程はすべてのことに通じます。学ぼうとする意欲を喚起し、努力が形となったときの喜びは何ものにも換え難いものです。

次に大切にしていることは、「一番大切なことを一番大切にすること」です。私の結婚式のときに恩師が、「一所懸命」と言う言葉を祝辞で話してくださいましたが、きっと男勝りな私を

成長する生徒たちを近くで見守ることが出来る生活を心より感謝しています。慌しい毎日を送っていますが、それは私の中で素晴らしい幸せな時間です。

それから迷った時に判断の指針としていることは、「人としてやらなければならぬこと」は「きちりやる」ということです。この軸はぶれないようにいつも思っています。時として揺らぐ私を導いてくれるのは夫の適切なアドバイスです。同居も介護も投げ出したいと思った時もありました。また、復職する事に悩んでいた時も、夫は私に「これまでどれだけの人に世話になって今の自分があるのか考えなくちゃいけない。必要とされるなら与えてもらったものを社会に返すのは当然の義務だ」と言って背中を押してくれました。そしていつもサポートしてくれています。

周囲の人たちにはもちろん二人の子ども達にもいろいろと支えられてただただ感謝の毎日です。3年ほど前から下の娘と一緒に

生きるということについて、どう向き合っているか。そんな視点から今回は教員という仕事に携わりながら生活しておられる都竹香寿子さんにお話を伺いました。

# こと

心配してくださったのだと思います。内容は、「家庭を選択した以上、家庭を大切に生きてほしい」というものでした。私は子どものころより学校の教員を目指し、念願叶って結婚前までは教員をしていましたが、結婚と同時に義母の介護を選択して退きました。義母は大学で教鞭をとっていた人で、教育に一身を捧げた人でした。そういう面でも私の尊敬する人であり、教員を辞め、介護に当たったことは迷

にお寺のおとき作りのお手伝いをさせてください。私もそうして育てられましたが、出来ることを出来る範囲で社会に返すのが当然と思える子どもにも育ってほしいと願っています。

これからの人生を考えると、多くの苦難が立ちほだかり、その都度揺らぐことがあると思いますが、今まで育てられ支えられてきた人の言葉をかみ締め、また、出来る限りお寺に通い教えを聞きながら、歩みを進めてまいりたいと思います。

(文責 都竹香寿子)



つづかすこ  
都竹 香寿子さん プロフィール  
1969年(昭和44年)6月24日生 40歳  
北九州市八幡西区に生まれる 現 岐阜市在住  
1994年 立命館大学大学院  
国際関係学修士課程修了  
京都嵯峨和装学院 高等師範  
茶道裏千家 専任講師  
正統即天門華道 師範  
ブリザードフラワー リッチェスタジオ講師  
現 市立中学校講師  
小学生と中学生の二児の母として  
多忙な毎日を送る



# 古寺を訪ねて

昨秋、当「岐阜同朋編集委員会」一同で、富山県南砺市にある、真宗大谷派の井波別院瑞泉寺を参拝してまいりました。井波別院は1390年に本願寺第5代・純如上人によって創建された。蓮如上人が第8代ですので、とても歴史あるお寺です。

大きな山門をくぐると、広大な境内に本堂と太子堂が目に入ります。しかし、大きさや歴史もさることながら、彫刻の素晴らしさにも目をひかれます。山門、本堂、太子堂それぞれに、美しく力強い彫刻が随所に散りばめられ、独特な雰囲気醸し出しています。この地では、井波彫刻という木彫刻が盛んですが、その井波彫刻は、井波別院開創を機に始まったそうです。ポーツとこの芸術的な彫刻とお堂を眺めると、アジア各国の仏教遺跡にみられるような仏教(宗教)と芸術の深

い関係性をあらためて感じます。太子堂には、聖徳太子の尊像が安置されており、毎年7月下旬に一週間かけて、聖徳太子絵伝八幅をもとに、絵解き説法が行われます。ここに多くの人がつめかけて、聖徳太子御一代記に耳をかたむける、全国でも稀な行事だそうです。

境内から外へ出ると、別院の前には石畳の八日町通り、別名瑞泉寺通りが続く。道の両側には彫刻店や郷土玩具店などが軒を連ね、格子戸のある町並みとともに趣のある風景を形づくっています。昔から、この地に住む人々が、この別院を中心に生活していたのだと思いを馳せながらこの通りを歩いていると、辺りの店からトントントンと木槌の音が響いてきて、昔の人々はどうな生活をしていただのかと思

像が膨らみます。井波別院は、ただ歴史のある、彫刻の素晴らしいお寺というだけでなく、この地に



住む人々に仏法を伝え、今もお、町の中心、生活の中心であり続けているように感じました。日頃は、目に見えない、形あるものに捉われがちですが、今回この別院を訪れて、お寺のあり方、存在意義についてあらためて考えさせられる時間をいただきました。

(吉田 慧)



井波別院瑞泉寺(右手前本堂 中央太子堂 左奥納骨堂)

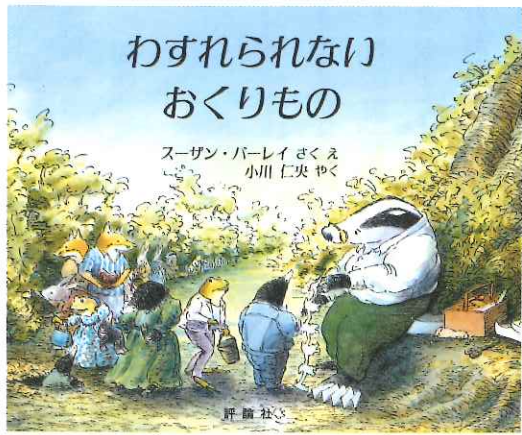
## MyBook

～心に残る絵本の紹介～



### 1 わすれられない おくりもの

スーザン・バーレイ さくえ  
小川 仁央 やく  
評論社 1,000円



#### あらすじ

ものしりでみんなに慕われていたアナグマは年寄って死んでしまいました。かけがえのない友を失った森のみんなはとてもつらく悲しみました。みんなはアナグマとの思い出を語りあい、残してくれた思いを大切にしました。でも、その悲しみを乗り越えることがなかなかできませんでした。

冬が終わり森に春がやってきました。雪が溶けたころアナグマが残してくれたものの「ゆたかさ」でみんなの悲しみもきえ、楽しい思い出を話すことができるようになったのです。

#### ひびく

大切な人を亡くし、私たちはどう悲しみを乗り越えていけばいいのでしょうか?…つなかりの中で私たちはどう生きればいいのか?…

「アナグマは死ぬことをおそれてはいません。死んでからだがなくなっても、心は残ることを知っ

### 2 赤いランドセル

おにつかるみ 著  
文芸社 1,000円



ていたからです。…美しい文章と素敵な絵が私たちに「生きる」と「死んでいく」との意味を考えさせてくれます。

#### あらすじ

5歳のえいみはとてもやさしいおじいちゃんが大好きでした。保育参観はいつもおじいちゃんが来てくれました。そんなおじいちゃんが参観日の一週間後に入院しました。とても重い病気が見つかったのです。髪の毛が抜け、おじいちゃん、会いに行く度にやせて小さくなっていました。ある日おじいちゃんは「ホスピスに行きたい」と言いました。「ホスピス」

#### ひびく

自分らしく死を迎えることは自分らしく生きることでしょう。死から目をそらす、しっかりと生きること、命の輝き、死に至るまでの懸命な生き方を残された家族や子どもたちに伝えていきたいですね。赤いランドセルには、おじいちゃんの何が詰まっているのか?…





# 今を見る 今を問う

「岐阜同朋」  
編集委員会委員長  
羽部 玲子

「うおもいでやろう  
としていいのか。どう  
いう願いをもってやっ  
ているのかという問い  
がなされているのだら  
うか。問われるより

代々守り継がれてきたもの、そ  
れを次代へとつなげていく、今を  
生きる者にはそう課せられたも  
のがある。私たち宗門にも守り  
受け継いでいくべきものが数知れ  
なくある。そんな守るべきものに  
対して、私たちはどれだけ真剣  
に向き合っているだろうか。

時の流れとともに形成されて  
きた事や形作られたものの中には、  
ともすると、親鸞聖人の教えが置  
き去りになっているものがあるの  
ではないか。そこに親鸞聖人の教  
えはどのようにおかれているのか。  
それが問われなまま、遂行され  
ていく事となっていないだろうか。

◆ 例えはいろいろな行事において、  
それぞれ表面的、形式的な見直  
しは成されても、もっと奥深いと  
ころにある、この行事はどうい

に限らず、日々の法務の中でも、  
本当にこれでいいのかと自問自  
答にかられ、それぞれの意義が  
問われてくる。そして法務にお  
けるひとつひとつの言動さえもが  
揺るぎ出す。僧籍を得て、あたり  
まえのように法衣をまとい袈裟  
をつける。しかし法衣を着るとい  
うこと、袈裟をつけるということ  
は何なのかと。僧籍を得るとい  
うことは何なのかというところ  
まで、立ち返っていく。月参りや  
法事、葬儀等々、これらのためだ  
けではないだろう。では一体何な  
のか。私たちはそこにどんな責務  
を果たしていかなければならな  
いのかと問われてくる。

◆ その問いに答えを見出そうと  
心の中でもがき、葛藤しながらも、  
未だ明確な答えは得られず、そ  
して得られないまま、しかし法衣  
に袖をおしている…。

◆ 他の教団から出されている教  
化冊子を手にも、「親鸞聖人のこと  
がとてもわかりやすく書いてある」

「親鸞聖人は、このことについ  
て、はたして何とっておられる  
のだろうか」  
この原点に戻ると、各々の行事

と喜んでおられるおばあさん。同じく  
他の教団が催す研修会に、「親鸞  
聖人のお話が聴けるから」と、う  
れしそうに出かける近所の女性。  
◆ その人たちは真宗であるかな  
いかということ以前に、ただ純粹  
に親鸞聖人の教えを聴きたいと、  
それがわかりやすく聴けるとい  
うことに喜びを感じているのだ。

◆ ここには確かに親鸞聖人の教  
えが求められている。その教えの  
真つただ中にいる我々は、その求  
められているものに対し、今はた  
してどれだけ応えられているの  
だろうか…。

◆ 悶々としたものを心に引きず  
りながら編集会議を終えて同朋  
会館を出ると、外はもう暗くな  
っていた。車に乗り駐車場から門  
を出た時、一人のおばあさんに目  
が止まった。

◆ 寒空の下、そのひとは、白い買  
い物袋を足元に置き、本堂に向  
かつて何度も何度も頭を下げな  
がら、合掌をしていた。

## ぶっじあれこれ

### お彼岸

春分の日と  
秋分の日を中  
心にして、前後  
各3日を合わせ  
た7日間を春と  
秋の「お彼岸」  
といいます。この  
期間に仏教行  
事として各寺々  
で「彼岸会」(ひ  
がんえ)が行わ  
れます。

「彼岸」とは「彼岸」(か  
のきし)という意味で、覚り  
の世界「浄土」を表すのに  
対し、私達が生きている娑婆  
(しゃば)を「此岸」(しがん)  
といいます。  
◆ 仏教の元の言葉でいえば  
「波羅蜜多」(パーラミター)  
の訳語の「到彼岸」(とうひ  
がん)を略したもので、差別  
動乱の迷いの此岸から、一如

平等の覚りの彼岸に到った  
こと、つまり仏道を成就した  
という意味といわれます。

春分の日と秋分の日は、  
太陽が真東から出て真西に  
沈みますが、中国の浄土教  
では、日没の所に阿弥陀仏  
の浄土を想って落日を拝ん  
だと伝えられます。

日本の四天王寺では創建  
当時、門前まで海が広がり、  
沈み行く夕日を拝むことが  
でき、その夕日を見た弘法  
大師・空海が西方に極楽浄  
土を見出す「日想観」と呼  
ばれる修行を始めたといわ  
れており、彼岸会に落日を拝  
む行事として受けつがれて  
いるそうです。

日本における資料としては、  
『日本後紀』に、「806年の  
春分の日に經典を読ませた」  
という記録があるのが最初  
です。以来、彼岸に仏教行事  
を行うようになってきました。

浄土真宗では、蓮如上人  
が59歳の時、吉崎坊舎(現・  
福井県)において、「春秋の  
彼岸は暑からず寒からず、  
仏法修行のよき時節」だと  
「お文」の中で言われており、  
彼岸会を勤められた記録が  
残されています。

◆ 日々聞法、念仏の生活が  
真宗門徒の生活態度であり  
ますが、日頃は日常の忙し  
さに追われ、情性に流され  
て大切な自分を見  
失って空しく過ごし  
てしまっている私達に、  
春秋の時節の折り目、  
暑からず寒からずの  
この彼岸の時節にこ  
そ、仏法に耳を傾け  
て、日頃の自分の在  
り方を知らされ、本  
当の自分を取り戻  
す「聞法修行のよき  
時節」なのでしょう。

お彼岸は、お墓参  
りやお内仏のおかざ



りも大切な勤めではありますが、  
真宗本廟、別院、ご縁のある  
お寺の法座にも足を運び聞  
法していきたいものです。お  
彼岸にお参りする私が仏法  
に耳を傾けてこそ、浄土の光  
(彼岸)に照らされ、私の迷い  
の生き様(此岸)に気づかさ  
れる大切な仏事であり、聞  
法こそお墓のご先祖から願  
われていることなのではない  
でしょうか。